

「頭陀(ずだ)」

平成30年5月第4週放送

お坊さんが、肩から斜めに掛けたり、首から掛けている布製のバックを見た事がありますか？これは古より僧侶が持ち歩く物で頭陀ずだ ぶくろ袋と呼ばれるものです。

それが元もとになり、巡礼じゆんれいで掛ける白い袋か ぶくろも頭陀袋ずだ ぶくろというようになり、近年きんねんではダブダブして何でも入るような袋ぶくろカバンも「ズダ袋ぶくろ」とか、少し濁音だくおんが取れて「ズタ袋ぶくろ」というようです。

さて、この語源ごげんとなった「頭陀」とは、「ふるい落とす」といった意味。それが僧侶そうりよの修行しゆぎようを表す言葉となりました。

その修行は煩惱ぼんのうの垢あかを払い落とす事。『頭陀行ずだ ぎよう』とも言い、托鉢たくはつをはじめとして、食事の回数や時間の制限、着る物の種類や数の制限、住む場所についての制限など、それぞれの実践により衣食住しゆうちやくへの執着しゆうちやくを持たずにひたすらに修行に励むことです。その修行で持ち歩く袋を頭陀袋というようになりました。

例えば、僧侶は常に托鉢によって食を得ること、そしてそれは相手を選ばずに家の並び順に行い、その時間は午前のみで一食とするとされていました。

托鉢でなく、自分で食事を探したり、作ったりする事では、えり好みこのする場合もあるでしょう。お金持ちの家で托鉢する事により、より豪華な食事を願う事にもなる事でしょう。時間や回数が決まっていなければ止めどなく食べ物を漁あさることにあさなるでしょう。これらの実践じっせんにより、より多く、豪華ごうかな食しょくを得るといえう貪むさぼりの心こころを振るい落とすという事になるのです。

また、うち捨てられた端切れすを拾い集め、洗って縫い合わせたもの、つまりお袈裟けさを着ることも決められていました。着るものの規定きていが無ければ、より綺麗なものを身につけたくなるでしょうし、何着なんちやくも持ちたいという気持ちきていが起こることでしょう。この実践じっせんにより、より綺麗なものを、より多く

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

といた^{むさぼ} 貪^りの^{こころ} 心^ふ を振るい落とすことになるのです。

^{さいきん} 最近 は「オシャレなズタ袋」といた^{むさぼ} った^{ぜんぜん} バッグもあるようですが、^{ほんらい} 本来 の意味からは全然 違^{ぜんぜん} ったものという事です、そして時に食べ物、着るものを^{ごの} えり好^{むさぼ} みしてしま^{ぼんのう} う日常から、貪^り を離^{あか} れ、煩^{はら} 悩^を の垢^を を払^い 落^と す「頭陀」の意味を考えてみてください。

— 終 —